

NUPACE Office の専任職員として半年の活動を振り返って

国際交流協力推進本部

交換留学担当専任職員（グローバル30特任職員）

牧 原 弘 昌

1. はじめに

名古屋大学が、平成21年7月に文部科学省「国際化拠点整備事業（グローバル30）」の初年度採択大学（13大学）の一つに選ばれた結果、名古屋大学の「グローバル30」（5年計画）に盛り込んだ国際化のための様々な取り組みが始動することとなった。平成21年4月時点で1,300名の留学生受入数を平成32（2020）年度までに3,000名に増やす計画とし、5分野（自動車工学、物理、化学、生物、社会科学）で英語による学部学位取得プログラムや9分野の英語による修士・博士プログラムを2011年秋より新たに開設する。さらに、学術交流協定大学との交換留学の一層の推進のため、「名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（NUPACE）」の受入れ数も平成20年度78名の実績から、平成32（2020）年度までに150名に増加させ、同時に派遣留学も平成20年度50名を140名に増加させる計画が加えられた。

このような背景から、グローバル30プロジェクト予算に基づき、平成21年9月から交換留学の受入れおよび派遣を具体的に推進するために2名の専任職員が採用され、筆者はそのうちの1名として留学生センターの短期留学室に加わった（もう1名は海外留学プログラム・マネージャーとして留学生センター・海外留学室に加わった）。

2. 主な担当職務

NUPACE は、全学的な協力体制の下で、プログラムの計画・立案、応募者対応・選考、学生受入・履修管理等教務、各種相談等の様々な実質的業務を、留学生センター短期留学部門3名の教員と国際学生交流課事務職員、そして短期留学室の事務補佐員で担ってきた。しかし、年々応募者数も受入れ数も増加する中で、様々な面で限界点に達してきており、今後の10年間でさらに受入れ数を倍増させるために、多くの業

務の見直し、効率化、増強が求められていた。

このような中で、着任した直後から関わった緊急案件が借り上げ民間アパートへの対応であり、国際学生交流課事務職員らと連携しながら、下記に詳述するように、様々な対応にあたった。そして、この半年間の主な職務内容は、新規渡日学生の受入れ業務、在籍するNUPACE学生の様々な相談に対する窓口業務、履修管理等教務、相談への対応、そして平成22年春受入れ及び秋受入れ応募書類の確認、問合せ対応等であった。

名古屋大学短期留学プログラムNUPACEの学生数は、一学期あたり約80名までに増加しており、学生の滞在中だけでなく無論来日前・来日後の事務作業の増加・複雑化も顕著になっている。これらの作業を担当しておられる2名の事務補佐の方に加え、筆者が平成21年9月より留学生センターの短期留学部門に国際交流協力推進本部所属の「交換留学プログラム専任職員」の形として加わり、過去15年のNUPACEの歴史で、最大の受け入れ人数となった平成21年、22年度のNUPACEのプログラム運営に参加している。

3. 借り上げアパート対応

名古屋大学では、平成21年度まで留学生が優先的に入居できる大学宿舎（総称して国際交流会館）は、インターナショナル・レジデンス、留学生会館、国際喫煙館（日本人学生との混住寮）、猪高宿舎を合わせても、約200室程度であり、平成21年11月時点の留学生数1550名の1割強しか入居できない状態である。従って、これまでの入居ルールとして、新規渡日者を優先し、原則として半年の入居期間しか認められないとしている。ただし、1年以内の滞在期間のプログラムに参加する留学生は、優先枠の範囲内で1年間の入居が認められる形となっていた。

平成19年度までは、新規渡日者がほとんど大学宿舎

に入居できる形で推移していたが、平成20年度後期から、「中国政府国家建設高水準大学公派研究生」の学生受入れが急増したことから、大学宿舎だけの新規渡日者の受入れができなくなり、民間宿舎（約50室）の借り上げ対応が開始された。

NUPACE に対しては、平成8年度のプログラム発足当初に40名の宿舎優先枠が認められ、大学宿舎の増強とともに優先枠の増加が認められ、平成17年度以降は60名の優先枠が認められていた。しかし、それ以降も NUPACE の受入れ数が増え続ける中で、年により数名から7-8名が優先枠を越える事態となり、大学宿舎の空室状況や一部民間アパートへの居住等から臨時の対応で乗り切ってきた経緯があったが、平成21年秋の受入れ選考過程で、14名が優先枠を越える状況が確認され、短期留学部門と国際学生交流課との協議の結果、民間宿舎の借り上げ対応が決定された。

筆者はそのような宿舎事情の転換期に、専任職員として加わった。借り上げ対応の民間アパートは9月上旬に決まっており、2つの民間アパート（ワンルーム、バス・トイレ・台所付き）に14名の学生が入居した。大学からは自転車で約15分の距離であり、最寄りの地下鉄の駅までも10分ほどの所に位置している。着任直後から、9月下旬の受入れのための家具類の整備、部屋の入居前状態の写真記録、宿舎オリエンテーション準備に関わることになった。

大学宿舎に入る NUPACE 学生との間で、待遇の差に大きな不満が出ないように、様々な配慮に務めた。入居する学生に対しては、渡日直後全体の NUPACE 学生のオリエンテーションの前に。アパートでの住み方に関するオリエンテーションを別途行い、基本的な規則等から、名古屋市のごみの処理の仕方、緊急時の対処の方法まで一通りの説明を行った。実際のところ、日本語の運用能力を持っていない学生を中心として入居後にサポートを必要としていることが多く、入居後に居室の不具合のためのメンテナンス会社との工事、インターネット接続工事のための通訳、その他 ad-hoc 的な事柄で、これらの学生の渡日後約2ヶ月間は幾度となく、この借り上げアパートに業務の合間を縫って足を運ぶことがあった。そういったことに加え、日本人の入居者同様、光熱費（電気代・ガス代）、健康保険料、国民年金等の郵便物がポストに届くため、各学生にそれぞれの請求書の目的、意味、支払い方法といった事柄を説明していく必要があった。これ

らを分かりやすく説明するため、地図や図表を加えたプリントを日本語版・英語版の両方作成しEメールで配布するなどの工夫をした。

おりしも、これらの学生の渡日数週間後の10月上旬に台風が上陸することがあり、一部の不安がる生徒の要望にこたえ、台風に関してどのような備えをするべきか、どのようにして英語で発信されている情報を得るかといった事柄をプリントにまとめ、各生徒に配布した。年始年末時には、名古屋市が各区で運営している休日診療所の場所等も、地図を添付したうえで、学生に配布した。

彼らの帰国が数ヶ月後に迫った今日は、アパートからの退去に関する準備も進めている。国際学生交流課が管理している、中国公派の学生用の借り上げアパートの退去時のプロセス等を参考にしながら、現在は退去時の居室チェックの手順、確認項目事項のガイドラインの作成を行っている。

平成22年度4月より、新たにインターナショナル・レジデンス山手が竣工し、留学生の入居枠が100室増加することとなった。これに伴い、NUPACE の入居優先枠が80名に増加することとなった。この結果、平成22年度秋の受入れは、大学宿舎で賄えそうな状況となっているが、この10年の間に NUPACE 受入れを150名までに増加する計画であるため、早晚同様な民間宿舎の借り上げ対応が必要となってくると思われる。今年度の経験で組み立てられた、短期留学生向け借り上げアパート等の入居から退去までの受け入れのプロセスを持てれば、将来の学生数の増加に対して、宿舎面での受け入れの対応は万全かと思われる。

4. 教務関係

NUPACE では、様々な部局に受入れる NUPACE 学生の履修管理を短期留学室で一括して行っている。これまで北山講師と事務補佐員（週3日勤務）が、履修管理と教務面の学生対応を行ってきたが、受入れ学生の増加とともに、その履修管理業務も増加の一途を辿っている。

各学部・大学院に所属する正規学生の場合は、各部局の教務担当事務が、全学教務管理システムと連携して履修管理を行っている。しかし、NUPACE の場合、大学院生向けと学部生向けの科目が混在していること、成績評価基準が一部異なっていること（単位互換

の目的から、UMAP（アジア太平洋大学交流機構）単位互換システムを採用のため、個別勉強指導（Guided Independent Study）により随時新規科目が発生すること、英文での成績証明書発行等、様々な特殊条件があるため、NUPACE 室で独自のデータベース（MS Access）が構築され、履修管理を行っている。

毎学期、全学にわたる80名を越える受講科目の一覧表を作成し、各科目に対しては部局事務を通しながら、受講者名簿の確認、成績報告依頼・受取りを行い、成績証明書の発行を一元的に行っている。

予め NUPACE で受講可能として開示している講義科目以外にも、部局で開講している英語による講義科目や、日本語で提供されている講義科目を追加申請する学生も少なくない。筆者がこの履修管理をほぼ引き継いだため、NUPACE 生に対してはほぼ毎日対応ができるようになり、北山講師と事務補佐員の負担が大きく軽減された。

NUPACE では、NUPACE 学生が受講科目に確実に参加するよう80%出席率を求めており、予め多くの NUPACE 学生の受講を前提にしている担当教員は把握しているが、NUPACE 学生の受講を想定しない科目の場合、出席管理ができていない事例が多かった。平成21年度秋学期からは、短期留学生向けの授業以外を履修する場合、出席票を各学生に持たせ、教員から各授業の終わりにサインをもらい、学期の終わりに成績評価の対象の一つとしてももらうという方法を始めた。各クラスの教員の負担を、短期留学生の存在によって高めないと配慮をしながらも、学生の出席を確認するシステムを構築した。

5. 応募者からの問合せ対応

平成22年春受け入れのための、渡日学生からの到着情報や生活に関する問い合わせは、北山講師に加え、筆者も対応することとなった。受け入れ決定の学生には渡日前情報として、“Pre-departure Information” と称した資料を、学生ビザの申請に必要な入国管理局から発行された在留資格証明書と共に送付している。この資料には出迎え・宿舎への入居可能日を初めとして、さしあたって本国で渡航準備の際に必要な情報を網羅しているのだが、それでも宿舎・授業・その他大学内外での生活等に関する詳細な質問が Email を通して寄せられることは多く、選考結果決

定から学生渡日までにかけては、各学生から寄せられるこれらの Email 対応に時間を費やした。

平成22年秋受け入れからは、これまで行っていた中部国際空港・名古屋駅までの出迎えの学生ボランティアの手配を行わない予定で準備を進めているが、これに伴い渡日前情報に関して、空港・駅からの大学までの詳しいアクセス等の情報も含めて、網羅する情報の範囲を含めて再検討する必要に差し迫っていると思われる。これに関しては、インターナショナル・レジデンス・国際喫煙館に加え、借り上げアパート等、学生が入居する宿舎の種類が増えたことに関しても同様で、これらに関しても今以上に渡日前の学生にとって必要な情報を取捨選択し、彼らに提供することの必要性を実感している。近日中に、これまでに渡日前に寄せられた学生からの質問等を参考にして、次回受け入れのための資料を作成していきたいと思う。

6. シンガポール・香港へ出張

平成22年1月の下旬に、留学生センター・短期留学部門 野水勉教授、石川クラウディア准教授、ならびに留学生センター・海外留学室 岩城奈巳准教授と共に、G30プロジェクトに向けた交換留学の拡大推進と学術交流協定締結の打ち合わせを目的とし、シンガポール・香港へ出張する機会を得た。シンガポールでは、ナンヤン工科大学、香港では香港科技大学、香港中文大学、香港大学の関係者と打ち合わせをする機会を得た。両都市とも近年のアジアでの顕著な経済発展の最前線を走っているということは、もはや特筆する必要もないのだが、今回これらの大学へ訪問する機会を持ち、高等教育へのミッション等の各大学の教育方針等を知ること、これらの有力大学が、どれほど今日の両都市国家の経済成長に強い影響を与えたかということ、改めて実感させられた。

これらの大学の訪問後、短期留学部門関係者が協定交渉を進め、同年6月までに香港大学、香港中文大学と全学間学術交流協定が締結され、香港科技大学とは工学部間の部局間協定が、いずれも学生交流協定を含む形で締結された。その中でも日本語学科を持つ香港中文大学からは、平成22年秋に1人の学生を迎えることとなり、筆者自身も今から心待ちにしている。同大学への訪問時に受けた説明によると、2年時に同学科の全ての生徒が日本へ留学する機会を持ち、帰国後に

受ける日本語能力検定（JLPT）1級の同学科の学生の合格率は近年では90%を超えたとのこと。年間40名の交換学生が日本の協定大学に留学している。全学向けの授業も含め日本語・英語で開講されている様々なクラスを履修できる NUPACE は、これらの高い日本語能力を持った学生にとって魅力的なものに映ると思われる。

これらの幾つかの大学等の訪問時には、国際企画課に相当する部署の教授・所長レベルの方に加え、筆者と似たような役割を各大学の交換留学プログラムの中で担っている同年代の方とも、インフォーマルに意見を交換する機会を持つことができ、とても有意義な打ち合わせになったと記憶している。自分自身の持つ NUPACE 内での役割の重要性を改めて実感するこ

とができ、業務においてのスキルの向上へのモチベーションを高めることが出来た。また各大学からいただいた資料の中でも、世界各国の有力大学から毎年多く交換留学生を受け入れている香港大学の到着前の留学生向けの生活情報の資料などは、図や写真をうまく活用し、初めて当地を訪れる学生に対して幾分の不安を持たせないような配慮がなされたものであり、上で述べた学生向けの新しい渡日前情報の資料の作成に際して参考になっている。今回のシンガポール、香港への出張は各大学との学術交流協定締結の本来の目的に加え、各大学の交換留学受け入れの実務を垣間見る機会を得ることができ、筆者個人にとっても実りの多いものとなった。